

にんげん讃歌

有名人を有名人たらしめているものとは「影響力」だと思う。

毎年多くの人がメディアに取り上げられ、そのほとんど大多数があつという間に消えてゆく。

それでも残り続ける人には、やはり何か、他者に対しての影響力があるのだろう。「カリスマ性」という言葉の意味にも通じるところがあるようにも思う。

かく言う僕も、これまでにも多くの人たちから影響を受け、それによって今の自分が形作られている。直接会って話をしたり、テレビやラジオなどのメディアを通して、その人の考え方を聞いたり、その人の著作を読んだり——様々な形で影響を受けてきた。

これは、僕からの、影響を受けた人たちに対してのファンレター集だ。



小田和正

小田和正さんは好きじゃなかった。正確に言うと『オフコース』は好きじゃなかった。中学生の頃、僕たちは横浜銀蠅だったり、RCサクセションだったり、ストリート・スライダーズだったり、攻撃的で、歌詞に何か反抗的な主張があるようなバンドに夢中だった。オフコースは女の子が聞くもんだと勝手に決めつけていた。音楽の時間、グループ毎の自由合唱の課題で僕たちのグループは多数決でオフコースの『さよなら』を歌うことになった。嫌で嫌でしょうがなかった。けど、不思議なことに、その歌をあまり聴いたことも無いのに、歌詞とメロディをすぐに覚えることが出来た。僕たちのグループの成績は良かった。

十八歳の時、田舎から大都会へ出た。それまで、のほほんと毎日を送っていた僕は、その都会のスピードに付いてゆくのには必死で、付き合い始めた彼女とも、何かギクシャクした関係で、自分自身を見失いそうになっていた。そんな生活の中で、ちょっと力づけられたテレビドラマがあった。『東京ラブストーリー』。田舎から出てきた主人公が、恋や仕事に悩みながらも、真っ直ぐに、ひたむきに、どんな事態とも向き合っていくドラマだ。このドラマは必ず見た。大変なのは僕だけじゃない気がして、救われたような気分になった。このドラマの主題歌を小田和正さんが歌っているのにはすぐに気が付いた。「そうか、オフコース、解散したんだ」と思ったが、特に感慨もなかった。だ

が、この主題歌『ラブストーリー』は突然に』は素晴らしかった。今でもこの曲を聴くと、ドラマのシーンや、それを見ていた僕自身の当時の生活を思い出す。

それから、テレビやラジオで小田和正さんの歌を聴いても、以前のような嫌悪感はなかった。いや、嫌悪感と言うよりも、むやみに突っ張って、拒絶していただけなのかもしれない。小田和正さんのメロディは心地良かった。

数年前にTBSで放送された音楽番組「風のようにうたが流れていた」のDVDを観る機会があった。最初はビール片手に横目で観ていたが、次第に画面にグイグイと引き込まれていくのがわかった。小田和正さんの巧さと懐の深さを初めて感じたからだ。小田和正さんの歌詞には奇をてらった単語は出てこない。ごくごく普通の、誰もが使う言葉だけで構成されている。メロディもあくまで心地良く、歌詞が耳にすっと入るようになっていく。「こういう音楽を、本当に上質な音楽と言うのかも知れないな」と、僕は歳を重ねて、やっと気が付いた。

思えば若かりし頃夢中になった横浜銀蠅はコミックバンドでしかなく、RCサクセッションやストリート・スライダーズも解散し、メンバーはR&Rを続けているものの、それはまた新しい形の音楽であり、あの時代の熱狂と同じものではない。

しかし、小田和正さんは、ずっと「小田和正」で有り続けた。そして、過剰なパフォーマンスを行うこともなく、聴き手が主役となるための、上質な音楽を作り続けていた。小田和正さんの歌を

聴くと、「あの日あの時、僕は何をしていたんだろう」と、眠っていた記憶がゆっくりと揺り起こされ、鮮明に甦ってくる。「音楽とは聴き手の物である」という言葉を語るとすれば、一番相応しい人物は小田和正さんで間違いない。

機会があれば小田和正さんのコンサートに行ってみようと思う。昔の僕からは思いもよらなかった事だ。もしかしたら、泣き出してしまうかも知れない。



千葉治郎

仮面ライダーが熱いらしい。『仮面ライダー響鬼』というシリーズは、視聴率テコ入れの為、途中からプロデューサーが変更された。すると抗議の電話やFAXが、山のようにテレビ局に届いたという。親子が世界観を共有し、楽しんでいた雰囲気はドラスティックに変わってしまった事が原因らしい。それだけ響鬼を楽しみにしていた人が多かったという事だ。

僕が子供の頃には「ウルトラマン」と「仮面ライダー」が二大特撮ヒーローだった。シリーズを重ねる毎に、全ライダー集合やウルトラ兄弟集合と言った、シリーズイベントの要素が増え、それはそれでワクワクしたのだが、最初の頃感じた、ヒーローが持つ「孤独」や「苦悩」は微塵も無くなっていた。

そういった反省も踏まえて、最近のシリーズは過去作品と一線を画した形で作られている。だが、それにしても「ウルトラマン」シリーズの低迷には目を覆うばかりだ。かつてウルトラマンと言えばTBSの看板番組として、映画並みの予算を掛けて丁寧な制作されていた。ところが今は、地方局で低予算制作されている。視聴率が取れなければ、再び悪循環のシステムで、過去の怪物にも一度登場願う有様だ。丁度過去の財産を喰い潰しながら生き長らえている「円谷プロ」の姿とダブってしまう。ウルトラマンやウルトラセブンも今ではパチンコ業界の走狗となって、庶民の金を吸い

上げるという「悪役」が板に付いてきた。過去の勇姿を知るだけに淋しいものがある。

昔、ヒーロー物を演じるのは、役者にとっても覚悟が要った。人気番組であればあるほどヒーローのイメージが役者自身に付き纏う。そのイメージを壊さぬよう「悪役」のオフアートを蹴った役者も多かったと聞く。

ひれくれた子供だった僕は、完全無欠のヒーローよりも「弱さ」を感じさせる正義の味方に惹かれた。子供なりに「一方的な力の正義」に疑問を感じていたのかも知れない。それは「帰ってきたウルトラマン」だったり「ライダーマン」だったり、そして仮面ライダーを人間の身でサポートするFBIの特命捜査官「滝和也」であった。

怪人に対して無茶な特攻をする滝に、「あゝ、滝も変身できたらいいのに」と何度も思ったものだが、それでも懸命に闘う姿には子供心に熱くなった。

滝を演じていた千葉治郎さんが、千葉真一さんの実弟であることを知ったのはずっと後になってからだった。

何度か千葉治郎さんの姿をテレビや映画で見る機会があったけれども、子供時代に熱狂した、あの滝和也役以上のインパクトは無かった。

数年前から漫画家の村枝賢一さんが『仮面ライダーSPIRITS』と題する旧ライダーのコミカライズを開始した（内山まもるさんのウルトラマンを超える出来の良さだ）。なんと物語の主演は滝和也

だった。これには嬉しくて、久々に漫画の単行本を買ってしまった。

そこに千葉治郎さんのインタビューがひっそりと収録されていた。

現在の千葉治郎さんは役者を辞め、樵を営む傍ら、千葉県森林整備協会で県有林保護監視員をしているという。保護林の不法伐採を監視し取り締まるのがその役目だ。

「滝和也の『正義』が、僕の生き方にも少なからず影響している」

そう語る前田満穂さん（千葉治郎さんの本名）は、紛れもなく『正義の味方』だった。

その瞬間僕の中で、一九七一年から三十四年の歳月を経て、滝和也は「仮面ライダー」に変身した。

最高の生き方だ。



張本勲

何気なく読んでいた、「終戦六十年」と題された週刊誌の特集記事の中の一つに目を奪われた。

「私は球界で唯一人の『被爆者健康手帳』を持つ選手でした」

そんな事を全く感じた事がなかっただけに、それは衝撃的な事実だった。

告白していたのは張本勲さん。広角打法、安打製造機と謳われ、首位打者七回。通算安打三千八十五本は不世出の日本記録だ。

張本さんが在日韓国人だという事は知っていた。しかし、被爆していた事までは知らなかった。その記事を読んだ後で、僕はある日の東京ドームでの出来事を思い出した。

プロ野球マスターズリーグの関係者である旧知の社長の厚意に甘える形で、僕は車いすの知人と東京ドームに観戦に出掛けた。マスターズリーグを見るのは僕にとっては二度目。最初の観戦で、あの「プロ野球ニュース」の佐々木信也さんの場内実況や、若い時に見た選手がプレーする姿を再び見られたこともあって、すっかりマスターズシンパになっていた。

知人はプロ野球初観戦だった。マスターズは関係者パスを貰うことが出来れば、グラウンドに入つて選手の練習を間近で見ることが出来る。それがこの日一番の楽しみだった。

パスを貰い、ブルペンなどを物珍しく眺めながら、いよいよ東京ドームのグラウンドへ向かう…

：その時、僕たちは警備員に呼び止められた。

「人工芝が痛みますから、車いすでグラウンドに入るのは止めてください」

僕は泣きそうな気分になった。それが楽しみでわざわざ来たのだ。知人は気を遣ってくれて、「片足でなら何とか立てるから、一緒に行こう」と言ってくれ、彼に肩を貸しながら、ホームベース近くに腰を下ろした。折角グラウンドを見て回れるのに、僕たちはポツンとそこに座ったままだった。

その時、ベンチの方から声がした。張本さんだった。僕が側に行くと、

「どうしたの？ あっ、君の連れ、足が悪いの。じゃあこっちに来てベンチに座りなよ」

恐縮しながらベンチへと向かう。知人は張本ファンで、少し興奮していた。時間ギリギリまで僕たちはベンチに居た。張本さんは練習の時間なのに、ずっと僕たちとたわいもない話をして付き合ってくれた。

試合はスタンド最後方の車いす用のスペースで観戦した。高齢の張本さんは当然スタメンではない。

終盤、場内に「代打、張本」のアナウンスが告げられた。この時ばかりは、ドームの半分程度の入りの客席も大いに沸いた。知人も一生懸命に応援していた。

結果は三振。残念だったね、と彼に声を掛けると、「張本選手が打席に入ったのを見られただけで幸せだ」と返された。

「張本勲」は、誰にとってもそんな選手なのだ。

数週間後、僕は甘えついでに、世話になった社長の後ろを金魚のフンよろしくへばり付いて、マスターズリーグの表彰式会場へと潜り込んだ。

一時代を築いた選手たちの祝宴は、そりやもう華やかなものだった。

宴の終盤、今シリーズの総評を求められた大沢親分はこう言った。

「東京ドリームスが優勝できなかった原因は、今年は張本が多く打席に立ち過ぎたせいじゃないかと思う」

親分に食ってかかる張本さん、ドツと笑いに包まれる会場。

ここでも「張本勲」は『特別な選手』だった。



筑紫哲也

筑紫哲也さんの考え方や論説は、盲目的に受け入れることが出来ない。だが、だからと言って無視することも、聞き流すことも出来ないという僕の中では不思議な位置にある。

安保闘争等、左翼運動盛んなりし頃を体験している人たちの話は、いつも違和感があった。自分が実感としては分からないことや、ソ連共産圏の崩壊によって、「それ見たことか」という気持ち先立つて、なかなかシンパシーを感じる事が出来ない。

だが、筑紫哲也さんは、おやつと思える行動を取ることがある。

あるニュース番組で筑紫さんは夜の渋谷に赴き、そこで遊んでいる若者たちと語らおうとした。当然会話は噛み合わない。ちよつとイタい雰囲気ブラウン管からは流れてくる。

それでも所謂「予定調和」が感じられないその番組に、僕はある種の「リアルさ」を感じた。テレビでは「ヤラセ」が流行り、いつか見たようなフォーマットで番組が進行しないと視聴者は違和感を感じる。それは取りも直さず報道番組がショー化していることを意味する。

そのような潮流の中で、他の口当たりの良いニュース司会者と違って、筑紫哲也さんの持つ「違和感」は報道の本質を僕に考えさせる。

そんな時に一つのエピソードを聞いた。

TBSのニュース番組で筑紫さんは某国の軍隊が虐殺を行った現場を、「屠殺場のようだ」と表現した。

この発言に怒ったのが東京都中央卸売市場や横浜市食肉市場の関係者と全芝浦屠場労組、全横浜屠場労組の各代表だ。彼らは筑紫さんのこの発言を「重大な差別発言である」とTBSへ猛抗議する。

TBSでは筑紫さんに謝罪のコメントを述べさせ、それでこの件の幕引きを図った。だが、事件はそれで終わらなかった。

屠場労組側はTBS側の対応が不十分であるとし、大がかりな差別問題確認糾弾会を開いたのだ。第一回目の大会は一九八九年十一月二十二日JR品川駅前の芝浦食肉市場で開催された。

冒頭で筑紫さんが「差別の意図はなかった」と釈明すると、参加者から一斉に激しい罵声や怒号が浴びせられた。その後、糾弾は延々四時間続いた。

以後も糾弾会は一九九〇年八月一日まで合計九回開催された。筑紫哲也さんはその全てに参加し、非難を一身に浴びた。

「ジャーナリストである以上、自分の発言の責任は自分が取る」
TBS関係者に、筑紫さんはそう語ったという。報道に携わる人間の最高の矜持である。そして、

筑紫さんは怒号の中、

「私の発言は、差別意識からではなく『偏見』だった」

と自らの意見を述べ、謝罪した。

筑紫哲也さんは逃げなかった。

それでも、筑紫哲也さんの論説には、世代の違いからか、僕には頷くことの方が圧倒的に少ない。しかし、敢えてその言葉に耳を傾けてみようと考えようになった。

批判精神を持ち、しかも自分の発言には責任を持つ——筑紫哲也さんが示したジャーナリストのプライドが、画面越しに伝わってくる気がするのだ。



天本英世

天本英世さんをガキの頃からTVで良く見ていた。勿論『天本英世』なんて名前なんか知らない。仮面ライダーの『死神博士』という敵役が異様にハマっていて、夢中になった。

いま思い出しても、病的な雰囲気や孕んだ狂気など、ダントツの存在感だった。死神博士が居たからこそ、仮面ライダーはヒット作になったのだと思う。

その後も死神博士は、別の役で何度か子供向けヒーロー番組に出演していた。決まって気の触れた悪の科学者のような役どころだった。

やがてそんな番組を卒業した僕は、すっかり死神博士を忘れていた。

二十歳の頃、ぼんやりと深夜番組を眺めると、唐突に死神博士が登場した。意表を突かれて、僕は見入った。死神博士が「天本英世」だったのも、この時初めて知った。

その番組は、ネット各局の新人アナウンサーをスタジオに集めて、ベテラン俳優にインタビュをするという、新人育成を兼ねた、その当時の空気を感じさせる、お気楽、お手軽な構成。

多分、天本さんの事を「予習」してたのだろう一人のアナウンサーが、「戦時中の体験を話してください」と振った。

それからの展開は、いま思い出しても異様な光景だった。

天本さんは三十人以上の新人アナウンサーたちを前に語り始めた。

「僕は今の東京大学の学生でした。学徒動員でねえ、特攻隊のパイロットとして訓練をさせられたんです。毎日毎日……仲間の何人かは、特攻隊として、この国のせいで死んだんだ、いや、殺されたんだ……」

話すうちに、天本さんの目は真っ赤になり、涙声に変わっていった。

番組の構成を無視したかのような天本さんの独白が続いた。いかに自分がこの国を嫌いかを述べらるうちに、言葉はだんだん怒気を帯びはじめた。

天本さんの話は、天皇批判にまで発展した。その時、突然テレビはCFに切り替わった。

あまりにも突然……それはTV局側にとっても不測の事態だったのだろう。

再度スタジオが映されたとき、そこにはぼつんと椅子があるだけで、天本さんの姿は無かった。

久しぶりに見た老俳優は、僕に鮮烈な印象を残した。

それからは、クイズ番組の回答者などで、天本さんの姿を何度かTVで見ることがあった。

そこでの天本さんは、出しゃばる事もなく、淡々と仕事をこなしているような印象だった。

仕事の関係で、二十七歳の時、僕は東京に出てきた。

仕事場は渋谷のど真ん中だった。

少しでも道を覚えようと、初日からあちこち歩いた。宮下公園の辺りをウロウロしていた時――。

目の前に「天本英世」が居た。

呆気にとられている僕の脇を、天本さんは足早に通り過ぎた。

東京に来て、初めて見た有名な人が天本英世さんだった。

その後も渋谷で何度か天本さんを見かける事があった。

いつも風のように飄々としていた。

二〇〇三年、天本英世長逝。

天本さんの遺志によって、遺灰はスペイン・アンダルシアの川に撒かれたと聞く。愛したフェデリコ・ガルシア・ロルカの詩のように。

超然と生きた人だと思う。
憧れる。



美空ひばり

僕が強く意識した時には、「美空ひばり」は既に天上界の人だった。

こんな人と僕なんか、絶対にどんな接点もないだろうな、と思っていた。

それでも、テレビ番組などで、黒田征太郎さんとゴールデン街で飲んだ、なんて話を聞くと、「思ってたよりも、気さくで優しい人かもしれないな」って感じたりもした。

それに、ゴールデン街っていうのが良かった。美空ひばりさんが少し身近に思えた。

不思議なことに、そんなに一生懸命に聞いた訳でもないのに、何曲かは美空ひばりさんの歌を歌える。ひばりさんの直撃世代でもないのに。僕の周りの連中はみんなそうだ。

美空ひばりさんが亡くなったことは、一つの時代の終焉を意味した。否応なしに、時代は平成へと移った。

東京に来た僕は、偶然に「ひばりプロダクション」の人と話す機会を得た。

色々な話は面白かった。特に、「ひばりファン」の人たちは命日より誕生日を重要な日と考えている、と聞かされて、驚いた。

「どうしてですか？」

僕が聞くと、

「ひばりさんは生きているんですよ」

との答えが返ってきた。

僕は、ただ単に「フアン」の心の中で生きている」という意味だろうと思い、また、別の話に耳を傾けた。

息子である加藤和也さんと、一度、BARで同席したこともあった。

テレビなどで見る、やんちゃで不良っぽいイメージとは違って、礼儀正しい、優しい印象だった。その好印象が、美空ひばりさんもすごく優しい人だったんだろうな、と確信させた。

その内に、仕事の関係で、何軒もある、いわゆる「美空ひばりの店」に行くことがあった。

内装、掲示物、雰囲気、そのどれを取っても、それは故人のものとは思えなく、まるで今も美空ひばりさんが、バリバリに活躍しているような印象だった。

『ひばりさんは生きていますよ』

僕はその言葉を思い出した。

そして、とうとう「ひばりプロダクション」を訪ねるという機会に恵まれた。

美空ひばりさんを良く知る人物にインタビューをするためだ。

まさかこんな接点があるなんて、想像も出来なかった。

インタビューでは色々な裏話や美空ひばりさんの実像が聞けた。思っていた通り、気さくで優し

い人柄だった。嬉しかった。

話の中で、不意に、またあの言葉に僕は出会う。

「ひばりさんはね、今でも生きていますよ」

ちよつと驚きながら、僕は、

「みんなの心の中に」ですよね？」

と聞き返した。

しかし、その人は横に首を振った。

「違いますね。少なくとも、我々はひばりさんが生きていると考えて今でも仕事をしている。だからひばりさんもちゃんと見ていてくれていて、真面目にやっていたら、必ず「褒美」をくれるんですよ」

「褒美？」

「ええ。つい先日『武蔵流転』という未発表曲が発見されました。僕たちにとってはひばりさんの新曲です」

それは丁度、NHK大河ドラマで「武蔵―MUSASHI」が放送されていた時期だった。

美空ひばりさんは生きています。

今度は僕も、はつきりと信じられた。



ヘルマン・ヘッセ

若い時にしか読めない本がある。

正確に言うと、若い時にしか、心から共感することが出来ない本と言った方が良いか……今、読み返してみても、あの頃の、のめり込むような感じは甦って来ない、そんな本。

僕にとって、そんな本が三冊ある。

少し爺臭いけど、若い人と話す時、

「これは、今読まなきゃ駄目だぞ」

と勧めてしまう。

ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』

大江健三郎『セブンティーン』

高野悦子『二十歳の原点』

この三冊だ。

いずれも青年期の焦燥感と不安感と孤独感が見事に描かれている。そして三冊とも悲劇的なラストを迎える（セブンティーンは発売禁止となった続編『政治少年死す』のタイトルからそれを伺い知ることが出来る）。

本当にこの三冊は名作だと思う。

と同時に、僕は心からこの三冊に共感できる年齢を過ぎてしまった。

『二十歳の原点』一冊のみで高野悦子さんはこの世を去り、大江健三郎さんは他の作品、『死者の奢り』なども面白かったが、セプンティーンほどには夢中になれなかった。

ところでヘルマン・ヘッセだ。

この作家の作品は、自分の人生と並行して読むのが正しいかのように、道標のように夢中になれる作品が幾つもある。

青年期の後半、僕は『荒野の狼』に夢中になった。かつてヒッピー達に愛読され一大ムーブメントを創った作品だ。

作品タイトルからその名を頂いたバンド「ステッペンウルフ」は『ボーン・トゥ・ビー・ワイルド（邦題・ワイルドで行こう）』のヒットを飛ばした。映画『イーजीライダー』の主題歌として使用された曲だ。

『荒野の狼』の世界は、音楽、映画、そして世界の全てを刺激した。勿論、僕も影響されて、その頃はむやみに突っていた。

三十代に入ると、「人生」や「生きる意味」について考えることが多くなった。必死で生きることだけをやっていた若い頃とはエライ違いだ。

そんな時に読んだのが『シッタールタ』だ。

車輪の下が自伝的小説と言われるように、神学校に通っていたヘッセが仏教世界に傾倒して書いた作品。

それでも西洋的なアプローチで書かれているから、これは面白かった。お釈迦様が売春婦のポン引きだったり、食い詰めて橋の渡し守をしたりしながら、やがて悟りを開く話。それまで読んだどんな仏教系のモノよりもゴードマ・シッタールタがビビッドに描かれ、夢中になって一気に読めた。読み終わって、気分が少し楽になった。

「ああ、いいんだよな、今はこのままでも」という気持ちになった。

それからあらゆる転機に、ヘッセの作品は力をくれている。それは以前に同じ場所を通った先人の声だ。知、というモノの本質に触れている実感がある。

ヘルマン・ヘッセは凄い。

今、僕は『ヘッセからの手紙』というヘルマン・ヘッセ研究会が編集した本をいつでも手元に置いている。

悩んだ時はこの本を開けばいい。

そこには同じ悩みを乗り越えたヘッセが居て、僕にアドバイスをくれる。



木村健悟

中学生の頃、プロレスファンだった。

ゴールデンタイムで、アントニオ猪木、藤波辰己、長州力を見ていた。

あの頃のプロレスは、まるで高視聴率ドラマのように次週が気になって、気になって仕方なかった。

今や報道ステーションで活躍する古舘伊知郎さんの功績もあるだろう。

が、僕は、脇を締めるバイプレーヤー達の存在が凄かったんだと思う。

プロレスと格闘技は違う。格闘技には一等賞しかない。でもプロレスには助演男優賞がある。僕にとって、その助演男優賞は間違いなく木村健悟さんだ。当時は「木村健吾」のリングネームだった。健悟さんがやられればやられるほど、タッチしてリング上に飛び込んだパートナーが光った。キビキビとした動きで、試合のテンポを作っていた。

親父とテレビを見ていた頃、親父が「木村は吉村道明みたいに誰とでも巧く組むなあ」と感心していたのを思い出す。そんな親父も今では鬼籍に入った。

僕と健悟さんは同郷だ。

二年に一度位の割合で、僕の田舎にもプロレスが来た。

健悟さんは地元のヒーロー、勿論メインイベントに登場だ。この日はかりは、パートナーのアントニオ猪木さんも健悟さんに見せ場を譲る。それがいつもテレビで見ている健悟さんとは違って、暗れ舞台、感が伝わって、「見に来て良かったなあ」と思わされた。

試合後、移動バスの前で、中学生の僕のたわいない質問にも、健悟さんは丁寧に答えてくれた。嬉しかった。

それから二十年以上が経った。

ひよんな切っ掛けで、新日本プロレスの仕事をした。担当者は健悟さんだった。

「自分、健悟さんと同郷なんですよ」

と僕が言うと、

「ああ、今年の台風は酷かったねえ、大丈夫だった？」

と健悟さんは返してくれた。間違はなく、目の前に居るのは、あの日の健悟さんだった。

結局、健悟さんが部署を変わるようになって、その仕事はフェイドアウトとなったが、これを機に、僕は再びプロレス会場に足を運び始めた。

ある日、ロビーで健悟さんに会った。

挨拶をすると、次の試合を一緒に観よう、と言う。

連れだって客席後方に行き、そこで観戦した。

良い試合だった。健悟さんは、リングの動きの一つひとつに、喜び、笑い、唸り、拍手をした。あの意味、ファン以上に試合をエンジョイしているように思えた。

とても気になっていた選手だという。

満足した健悟さんはバックステージへと戻って行った。

喜怒哀楽の全てをリング上で見せるのがプロレスのプロレスたる由縁だ。

その為には健悟さんのような名脇役が、絶対に必要だ。

しかし、最近のプロレスは、誰もが主役を張ろうとして、どうしても物語が続かない。プロレス人氣が落ちているのには、そんな事も関係しているのかも知れない。

新日本プロレスが、新日本プロレスのゲームを作っている会社を買収されるという、本末転倒の事件があった。

その後、ひっそりと木村健悟さんは、三十三年間在籍した新日本に別れを告げた。僕にとっての、一つの時代が確実に終わってしまった。



上岡龍太郎

上岡龍太郎さんをTVで初めて見たときの印象は「京都人」だった。

実は僕は京都人に対してあまりいい印象を持っていなかった。

勿論、勝手な思いこみだが、何か嫌味で、田舎者の僕なんか、見下してるように感じた。

それに、女言葉で喋る京都人の男に我慢ならなかった。

「何してはりますの？」

なんて聞かれた時には、この野郎、ブン殴ってやろうか？ と思ったこともあった。

だから当初、僕にとって上岡龍太郎さんは、注視する存在ではなかった。

それでも深夜番組の『バベポTV』などで、上岡さんのあまりの毒舌ぶりに、思わず大笑いしている僕が居た。

そのひねくれた視点は、むしろ格好良さまで漂わせていた。

京都人の知り合いが増えると、僕の京都人に対する偏見も、次第に和らいでいった。

彼らはみんな上岡龍太郎さんのファンだった。

「あのシニカルな口調が最高なんよ」

と、彼らは口を揃えた。

次第に僕も上岡龍太郎さんのファンになっていた。

だが、突然、売れっ子の筈の上岡さんは、「海外でプロゴルファーになる」との言葉を残し、忽然と姿を消した。

見事なくらい鮮やかな引退だった。

そして、一度消えた上岡さんは目立つ舞台に戻ってくることはなかった。

上岡さんが消えてから、深夜番組がもの凄くつまらなくなった。

仕事を通じて知り合った芸人のぜんじろうさんが、ある日、ふと言った。

「僕、上岡一門なんですよ」

興をそそられて、色々と聞いてみた。

「師匠は凄いですよ。僕らの舞台もよく見て、ちょっとオモロイなと思ったら、弟子のアイデアでも容赦なくパクるんです。しかもそれが僕らがやったのより数段面白くて完成されているから手に負えないんです」

「僕がテレビのレギュラーの仕事を初めて貰ったとき、師匠に『必ず毎回現場へ遅刻して行け』と命令されたんです。遅刻して行ったらスタッフ全員がピリピリした雰囲気です。だから僕も色々考えて、ここで詫びるんじゃなくて、必ず面白い挨拶で笑わせろって言うんですよ。だから僕も色々考えて、『今日のは向かい風がキツくて』とか、『信号待ちしたら三十分も赤信号が続いて』とか、馬鹿な

言い訳ばかり一生懸命考えました。でも、それが発想力や度胸を付ける何よりの『稽古』だったんです」

上岡龍太郎さんってどんな人なのか、僕は彼に聞いてみた。答えはほぼ僕の予想通りだった。

「師匠は良くも悪くも二十四時間、『芸』の事ばかり考えている人です。生き方そのものが『上岡龍太郎』という作品のようなものです」

その言葉に大きく頷いた僕は、「引退」の事に関しても聞いた。

「アレは師匠のギャクですよ」

「ギャク？」

「ほら、海外でゴルフしてれば、日本と違ってプロ資格は要らないから、名乗った時点でプロなんです」

自らの引退まで笑芸の一部とする生き方に嘆息した。

ぜんじろうさんは最後に、

「僕の夢は、師匠が『こりゃ出なアカンなあ』と思えるような舞台を作ることなんです」と語ってくれた。

僕も楽しみに、その日を待ちたい。



古舘伊知郎

古舘伊知郎さんより記憶力の良い人を僕は知らない。

六本木のある店で、偶然居合わせた僕たちの馬鹿な質問にも、古舘さんは丁寧な返答に答えてくれた。

僕にとって、金曜八時の「ワールドプロレスリング」は青春そのものだった。

「燃える闘魂、風車の理論」

「現代に甦ったネプチューン伝説、三又の槍」

「時代を変えるか革命戦士」

「黒髪のプロレスピエール」

などなど、人気レスラーをビジュアルイメージ以上に盛り上げる実況・名台詞の数々。

古舘さんを超える格闘実況アナウンサーは未だに誰も居ない。

プロレスフリークだった子供時代に戻った感覚で、つついっプロレスの話ばかり聞いてしまう。

「古舘さん、僕、大阪城ホールを最初に使った大会の『アントニオ猪木 対 ブルーザー・プロデュー』

を観に行ったんですよ」

多少酔っ払って、調子に乗った僕は、大きな声で、そう古舘さんに告げた。

すると、古舘さんは、優しい眼差しで、

「ああ、覚えているよ。あの時僕はこう実況したんだよ……『今夜遂に、都会に迷い込んだインテリ ジェントモンスター、ブルーザ・ブロディと対峙しますアントニオ猪木、落日の闘魂は見たくない、今夜魂の導火線に火がつくのか——』……」

と、例の名調子で、当時の実況を再現してくれた。

僕は痺れた。

酔いが一気に醒めた。

それは観戦後、テレビで録画中継を再び見た時に、古館さんが実況していた内容に間違いなかった。

初めての大会試合観戦に興奮した僕は、後日のオンエアをビデオに撮って、何度も繰り返し観ていた。

だから、僕はハッキリと覚えていたのだ。

「ゾクツ」と鳥肌が立った。

「古館さんは実況した内容を全部覚えているんですか？」

僕の連れが古館さんに質問した。

「うん。覚えているものなんだよね」

この言葉のさり気ない凄さに、僕は更にビビった。

古館さんは日本一早口で捲し立てることが出来る人と思われている。その分、言葉の多さ、語彙の豊富さは半端ではない。だが、それらをキチンと記憶しているなんて、想像もしていなかった。楽しい夜だった。

久米宏さんが降板したテレビ朝日の夜十時、古館さんに白羽の矢が立った。

『報道ステーション』

世間では、賛否両論が渦巻いていた。

だけでも、僕は思っていた。「古館さんしか居ない。絶対に居ない」。

古館さんは、それまでのニュースキャスターとは違って、敢えて神経を逆撫するような質問で、

相手の『素』の感情を引き出し続けた。

やがて視聴者は、そのやり取りから目が離せなくなった。

格闘実況とは違うフィールドで、しかし、古館さんは闘い続けていた。

そして、古館さんは「対『世間』」という大会試合に見事勝利を収めた。

報道ステーションは押しも押されぬ人気番組として、現在も君臨している。

後日、古館さんにお会いした時、僕のことをちゃんと覚えていてくれた。



今田耕司

面白いことにショービジネスの世界では、一般客の評価以上に仲間内からも凄く評価される人が居る。

ある店で誰もが知っている有名バンドのメンバーが、彼と同席して居るミュージシャンがいかに凄いかを力説していた。

しかし残念ながら、僕はそのミュージシャンを知らなかった。

それでも力説するだけあって演奏してくれたピアノは素晴らしく、それまでには聞いたことのないようなものだった。

いわゆる「玄人好み」ってやつだ。

芸人の世界でもそんな存在が居る。

今田耕司さんだ。

若手芸人たちと話をすれば、必ず今田さんの名前が出てくる。

「僕は普通に面白いから好きだけど、何がそんなに凄いの?」

答えは大体同じような感じだ。

「受けの凄味なんですよ。たけしさん、タモリさん、さんまさん。あの三人と絡んで、いつも違和

感なく真横の席を確保している。普通、こんな凄い人たちを絡んだら、凄い影響を受けてしまいます。でも、今田さんは、それでありながら『今田耕司』であり続けている……それが凄いですよ」

「ふくん、なるほどねえ」

「受けの凄味って言ったら判りますか？」

「うん、何となく判るよ。プロレスで言えば木村健悟さんみたいなもんだね」

「いや、逆に僕がそっちの方は判りません」

そんな話をしながらも、普通に見ているより今田耕司さんって凄えんだなあ、きつと無茶苦茶色々な所に気を遣って仕事をやってるんだろうなあ、なんて考えていた。

芸人の村田渚くんと、俺のお気に入り寿司屋で飲んでた。奥のテーブル席だった。渚くんは丁度テレビで人気があったコンビを解散したばかりの時期だった。

程良く酔っ払ってトイレに向かったとき、渚くんはカウンターに今田耕司さんが居たのを見つけた。

「今田さん、どうも」

渚くんはカウンターの方へ挨拶に行った。

二人の会話がそれとはなしに聞こえてきた。

今田さんは渚くんを励まし、いつでも吉本に来いよ、といった感じの話をしていた。

想像通り細やかな気を遣える人だった。

渚くんがテーブルに戻ってきたとき、少し元気になっているように感じた。

今田さんはこちらに一声掛けてくれて、数人の連れ合いとともに先に店を後にした。

それからしばらくして、僕たちも帰ろうと、大将に「お勘定」と頼んだ。

ところが大将から意外な返事が。

「そちらのテーブルの分まで今田さんが払って行かれましたよ」

僕は「しまった」と思った。同じ芸人である渚くんはともかく、きちんとした挨拶も出来てないのに僕まで奢って貰ったら申し訳ない。

と、同時に「スマートな人だなあ」とも思った。

後日、知り合いの女性ディレクターにその事を話すと、「今田さんはさんまさんと仕事をして、そういうったさんまさんの格好イイ所を学んだのね」と返された。

それでもやっぱり心残りだった僕は、大将に無理を言っつて、今田さんに飲んで貰うために新潟の酒をその寿司屋に預けておいた。

後日、店に行くと大将が、「今田さん飲まれましたよ。美味しかったって。そんなに飲めないから残りの半分は飲んでくださいって」。

どこまでも細やかでスマートな人だ。



I Z A M

不思議な「縁」を感じる人が居る。

僕にとってそれは「I Z A M」という存在だ。

女装の麗人として、バンド「S H A Z N A」でデビューした彼は、一躍時の人となった。

その頃の僕は大阪に居て、テレビで「面白いやつらが出てきたなあ」と眺めてるだけだった。

仕事の関係で上京した僕は、お上りさんよろしく、東京のあちこちを、少しでも憶えようとウロウロしていた。

ある日、代官山で撮影をしている一団に出くわした。S H A Z N Aの撮影だった。その時初めてI Z A Mさんを生で見た。

「凄げえ、でっけー!」

それが第一印象だった。テレビで見るタレントを、生で見たときの感想は「何だ、意外と小さいな」が普通だった僕にとって、ちょっととした驚きだった。

上京してから、家の近所に馴染みの居酒屋が出来た。

そこで知り合った酒癖の悪い、それでも優しく面白い人が、実はI Z A Mさんのマネージャーだった。

彼を通して、色々と言われた話を聞いた。当時の彼は超売れっ子で、一日に僅か三〜四時間程度の睡眠しか取らず仕事に追われている頃だった。

そして衝撃的だった結婚と離婚。

その後、そのIZAMさんのマネージャーは会社を辞め、田舎に帰って行った。

暫くの間、IZAMさんは沈黙していた。

ある雑誌の仕事で、僕は活動を再開したIZAMさんのインタビューをする事になった。移籍したばかりの新しい事務所で、僕は初めてIZAMさんに挨拶した。もの凄く物腰の柔らかい人だった。「こりゃ女の子にはモテるだろうなあ」と、僕ですら思った。だけど、話をしている内に、彼言葉の中に凛とした、強い、極めて男性的なものも感じた。

これが縁で、IZAMさんの事務所とやり取りをするようになった。

他人から裏切られることの多かった彼は、それでも、

「当時の僕にとっては貴重な経験でした」

と、全てを良い思い出として振り返り、

「人を好きになったり、誰かに何かを伝えようとする事って、やっぱり素敵な事だと思います」

と、クリエイター魂を覗かせる事が多かった。

何度か、彼のライブや舞台に足を運んだ。その度にIZAMさんは、良い意味で予想を裏切って

くれる。

新宿でのライブでは、ゲストに『うる星やつら』のラムちゃんの声を演じていた平野文さんが、突然のゲストで現れ、観客をビックリさせた。

「やっぱりウチのIZAMは最高だったちゃ」

と、アニメのまんまで、最初は声だけの登場だったから尚更だ。

青山でのミュージカルでは、ピーター・アレンのゲイの恋人役を、本格的ミュージカル初挑戦とは思えないほど堂々と演じていた。

「自分が楽しいと思った事をやりたいんですよ。そうすれば、少なくとも僕と同じような考え方の人は楽しんでもくれる筈だから」

そう話してくれたIZAMさんの言葉は正しかった。僕自身、とても楽しませて貰っている。

何かしら彼の要所で縁があることを、僕は幸せに思う。

映画製作、SHAZNA再結成と、今もIZAMさんは走り続けている。

まだまだ楽しませてくれそうだ。



村田渚

日曜日の夕方、お笑い芸人の佐野忠宏くんから電話があった。

「これから大事なことを言いますから、しっかりと聞いてください」

「何だよ、改まって」

「渚さんが、死にました」

「えっ……」

二の句が継げなかった。頭の中が真っ白になった。

二〇〇六年十一月十一日、村田渚急逝。享年三十五歳。

彼と初めて出会ったのは、『自縛』というライブシリーズを「フォークダンスDE成子坂」がやっている頃だった。このライブにはビデオ化の企画があり、企画をした大手出版社の人間とよく仕事をやっていた事もあって、パッケージや広告のアートディレクションを引き受けたのが切っ掛けだった。

丁度僕も三十歳になった頃で、あまりTVのバラエティ番組を観なくなっていた時期だったが、舞

台で見たフオークダンスDE成子坂は掛け値なしに面白かった。

桶田敬太郎さんの「天才」を感じさせるボケと存在感。そしてそれを十二分に引き出す村田渚くんの鋭いツツコミ。

フオークダンスDE成子坂は同時期の芸人たちと比べても頭ひとつ抜きん出た存在だった。たちまちには、僕は彼らのファンになった。

渚くんとは、彼の趣味も「麻雀」という事もあって、よく一緒に徹マンをした。サービス精神旺盛な彼は、他の三人にツツコミを入れて、よく笑わせてくれた。

酒もよく飲んだ。酔った彼は話し好きで、情熱を傾けている「お笑い」についてよく語ってくれた。酒が入らなくても、一晩中、芸事について話し続けたこともある。彼は「芸」に対して、いつも真摯だった。仕事上でも色々なアドバイスをして貰った。

最後に飲んだのは、彼が住んでいる武蔵小山でだった。酒のピッチが進んでしまい、肴にほとんど手を付けないまま、二人居酒屋のカウンターで飲み続けた。

それからまだひと月も経っていないのに……

彼の遺体があるという荏原警察署に急いで向かった。しかし、警察の規則によって会えなかった。翌日、荏原警察で渚くんのお母さんに会った。僕は彼がどれほど一生懸命に自分の仕事に取り組

んでいたかを伝えたかった。上手く伝えられたかどうかは自信がないが、とにかく話した。

お母さんは、今田耕司さんに息子が色々話を聞いて貰い、寿司までご馳走になった話をしてくれた。それは丁度、僕が同席していた時の話だった。僕は何度も相槌を打った。

警察が許可を出して、やっと彼と対面することが出来た。

彼の顔を見たとき、色々と言いたいことがあつたけど、言葉が出なかった。

泣いた、泣いた、泣いた、泣いた。

これ程泣いたのは十年ぶりぐらいだ。

参列者の横を通り、しばらく経ってから、やっと周りの様子が見えた。

沢山の芸人さんたちが泣いていた。「笑い」に命を賭けている人たちが泣いていた。凄い光景だった。「渚くん、本当に頑張ってたからなあ」僕は心の中で彼に呟いた。

何かの折に彼のことを語り、心の中の彼を決して風化させない。

それが残された僕の成すべき事だ。



佐野忠宏（寿司）

「芸人・村田渚」の急逝ショックからなかなか立ち直ることが出来なかった。暫くは、人と会うたびに渚くんの話となった。

そんなある日、渚くんの後輩芸人である佐野忠宏さんから電話があった。思えば、あの日も、佐野くんの電話で渚くんの死を知ったのだ。

「明後日、会えませんか？」

年末進行の最中だったが、僕は快諾した。

品川のホテルでの営業の仕事に来なかった渚くんを心配して、自宅に行き、亡くなっていた彼を発見したのが佐野くんだった。

ある意味で、彼は誰よりも渚くんの側にいた。「フォークダンスDE成子坂」の解散後は、同じく「ピテカンバブー」というコンビを解散していた佐野くんと、暫定的なユニットも結成していた。

「見つけてくれたのが、本当にお前で良かった。多分、渚が呼んだんだよ」

荏原警察でのお別れでは、佐野くんは芸人仲間たちに、そんな風に声を掛けられていた。それだけに、僕なんかよりもっととショックは大きかった筈だ。

佐野くんのごことは、ずっと心配していた。

幸いにも、彼はその後、熱海と沖繩で、営業の仕事が入っており、暫くは全てを忘れて仕事に打ち込める状況だったと聞いた。

「それでも、ふとホテルで独りになった時、渚さんの事を考えてしまうんです」

麻布十番の老舗「あべちゃん」にて再会した佐野くんは、ポツリ、ポツリと話し出した。

渚くん、佐野くんとの三人で飲むこともしばしばあった事を思い出した。

二人で飲んでゐるのに、そこに渚くんが居ないことの方を考えてしまう。

一通りの料理を口にして、僕たちは河岸を変えた。

どうしても大声で騒ぐような雰囲気にはならなかったから、静かなBARの方が話し易かった。

カウンターの端に座って二人で飲んだ。

渚くんと最後に飲んだのも、居酒屋のカウンターの端っこだったなあ、と思い出した。

「僕、芸名を変えようと思うんです」

突然、佐野くんが言った。

「へえ、どんな名前に」

「ことぶきつかさって変えるつもりです」

「ことぶきつかさ……あつ、『寿司』かあ。うん、面白いねその名前」

「良いでしょう。これ、実は渚さんが、ネタのために考えた名前なんです。面白いから、僕、欲し

くなって渚さんにお願ひしたんです」

「そうか、渚くんの」

「渚さんの元相手の桶田さんや、今の事務所の先輩で、渚さんと同期だったくりーむしちゅーの有田さんや、上田さんにも話して、それは良い事だと言って貰いました」

「佐野くんが渚くんに貰った一番の財産になる訳だね」

「そうです。それと渚さんにはお世話になるばかりで、何も恩返しが出来ていません。だから、俺が『寿司』の名前で一人前になった時、『この名前は、お世話になった、才能ある先輩芸人が考えたものなんです。若くして亡くなりましたけど、村田渚さんです』ってみんなの前で言いたいんです。

誰も『村田渚』の名前を忘れないように」

彼の想いに、目頭が熱くなった。

それから僕たちは、「どうすれば『寿司』が売れるか」について色々語り合った。

きつとその場所には村田渚くんも居てくれたと思う。彼の想いも、きつと僕と同じだろう。

頑張れよ、「しんがきつか寿司」。



アントニオ猪木

僕の今までの人生の中で、一番出会って影響を受けた人を挙げると言われれば、間違いなくアントニオ猪木会長（いつも会長と呼んでいるので）を挙げる。「にんげん讃歌」の最後には、猪木会長のことを書こうと、最初から決めていた。

僕と猪木会長の出会いは二十五年程前、僕の田舎に新日本プロレスの興業がやって来た時だ。プロレスファンの中学生だった僕は、田舎者の無遠慮さを発揮して、金魚の糞よろしく猪木会長の後を追いかけていた。会長がオデン屋で昼食を取っているときも、ずっと窓から覗いていた。まったくクソ迷惑なガキだった。

店から出た猪木会長の前に出ようと道路に飛び出した僕は、一喝された。「バカヤロー！ 危ねえだろ！ 車に轢かれちゃうぞ」

すっかり恐縮してしまった僕は、会長の後を追うのを止めた。ホントは猪木会長のサインが欲しかったんだ。

高校、大学、社会人になっても、プロレス会場へは足を運んだ。猪木会長のプロレスは、大のおとなを興奮させ、感動させ、泣かせてしまう……それは素晴らしいものだった。

大阪にいた頃、僕はある上場企業の広告の仕事をしていた。その会社は猪木会長をCMキャラク

ターに使っていたので親近感があった。社長も生意気なガキだった僕を良く可愛がってくれた。

東京に引越してしばらく経ったある日、その社長から電話があった。

「今日、猪木さんと食事するんやけど、お前も来るか？」

二つ返事で、僕は出掛ける準備にとりかかった。

初めて言葉を交わした猪木会長は、スポーツマンそのものだった。そして、僕が思っていた通り、人間としての魅力に溢れた人だった。

何度か会う内に、親しくさせて貰うようになった。僕の誕生日には、「元気な酒を飲みましょう」と書かれた三十一年モノのスコッチを頂いた。どうしても猪木会長のサインが欲しかった中学生の頃を思い出した。二十年以上かかって、思いもしなかった形でその望みは叶った。

猪木会長のお馴染みの台詞は「元気ですかー!」。これは全ての与えられた境遇をポジティブに受けとめることで、人生に対する勇気を持つという意味の詰まった言葉だ。本当に、元気がなければ何も出来ない。

また、猪木会長からは物事を巨視的に見ることを教えられた。

私利私欲のなさにも呆れてしまう位の時もある。病床の同期レスラー大木金太郎さんを韓国に見舞った時には、自分の財布ごと置いてきたような、男気に溢れる人だ。

少年時代をブラジル移民として、苦勞して過ごしたため、発展途上国の子どもたちには人一倍優

しい。そして自然を愛し、常に環境問題について考えている。会長の影響で、僕も「ナシヨナル・ジオ・グラフィック」をよく観るようになった。

「人間の器が大きい」とは、きつと猪木会長のような人を指すのだろう。

友人だった芸人の村田渚くんの急逝で落ち込んでいた僕に会長は言ってくれた。

「そりゃ死別は誰だって悲しい。でもこの世でできる仕事を精一杯やって、そして新しい世界に旅立ったんだ。その旅立ちを喜んであげようよ」

同時期に、猪木会長は大木金太郎さんというかけがえのない親友を亡くしたばかりだった。

猪木会長の言葉はいつも力をくれる。

まさか、こんな形で、中学生の頃に憧れていたスーパースターと親しくなれるなんて……

「会長、人生っていうのは、出会いの奇跡に満ち満ちていますね」

ちよつと小生意気に僕が言うと、

「いい事を言うなあ」

と言って、猪木会長は笑った。

この「にんげん讃歌」は二〇〇五年から二〇〇七年まで、月刊経済誌の『グローバルヴィジョン』に連載したものです。当時（いや今でもそうですが）、僕は「社会悪」への批判、警鐘のために、攻撃的な記事を書いていました。

そんな中で、一ページの連載コーナーを持たせて貰うことになって、僕は普段と違って、自分の好きな人たちのことを書いてみたいと思い、連載がスタートしました。今、見返すと、最初にも書きましたが、本当に「出せなかったファンレター集」というような文章です。

僕は、本来人間は「性善説」ではなく「性悪説」だと思っています。厳しい大自然のルールで生きる野生動物などは、自分自身の命を守るためになら何でもします。人間も動物である以上、社会性を持たず、誰とも接しなければ野生動物のような状態となるでしょう。

だが、僕たちは幸いな事に、平和な時代に生まれ、人間社会の中で色々な人と出会ったり、他者から影響を受け、自分自身を創り上げる機会を得ました。僕自身もこの「にんげん讃歌」に出てくる人たちの影響を受け（本当はもっと多くの人たちの影響を受けているのですが、雑誌連載の特性上、有名人だけの限定となりました）、今の僕が出来上がっていると思います。

連載中には、芸人の村田渚くんの急逝という、一生涯忘れられないであろう出来事がありました。文章を見返すと、当時のことがまざまざと甦ってきます。

連載は「小野木良太」というペンネームで書きました。これは僕の大切な友人二名の名前から拝

借したものです。

その生き様や考え方で、僕に大きな影響を与えてくれた素晴らしき人たちが。

心から感謝しております。

そして、やはり人生は出会いの奇跡に満ちていると思います。

世の中には、「何でこんな奴が！」と思うほどの、悪い奴、嫌いな奴も溢れています。

それでも、九十九人の嫌な奴に会ったとしても、一人の素晴らしい人との出会いがあれば、人生は生きるに値するものと信じています。

やっぱり、僕は「にんげん」が大好きです。

二〇〇八年五月十七日

甘井もとゆき